Last Day

アル・ソンフォ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

４カ月ぶりの投稿です。

ターニャの帝国での最後の日のお話です。

３―４話構成を予定しております。

まずは、序の部分を投稿いたします。

目　次

第1話：最後の始まり ―――― 1
第2話：訪問者 ―――― 5

第1話：最後の始まり

「まだ来ないか。」

ターニャはつぶやく。

東部戦線が完全に崩壊し、帝国に残された時間は残り少ない。もはや勝利ははるか遠くに消え去り、敗北を先延ばしにするため、いや、すこしでもましな敗北をするためだけに全ての資源が根こそぎ投じられている状況である

「本来ならばもうこのようなことはしなくて良かったはずなのだが」

ターニャは懐から演算宝珠を取り出す。赤く輝く宝珠の表面に一人の少女が映っている。それは金髪碧眼の端正な顔立ちをしているが、死んだ魚のような目と苦悩に満ちた厳しい表情によって可憐という言葉を遠ざけている。

「存在Xめ、あくまでも私を戦争で追い詰め続けるつもりか。」

そう言いながら演算宝珠を握りしめる。血と硝煙に染まり切ったはずの手は長いこと戦場を駆け巡ってきたのが嘘であるかのように白く綺麗なままである。

当初の予定であれば今日まで生き残った大隊隊員と共に既に帝国を悠々と離脱しているはずだった。

ターニャは帝国の勝利の可能性が潰えた時、二つの計画を作り上げた。『バルバロッサ』計画と『ペーパークリップ』計画である。前者はライヒの再建と再統一への長期プランであり、合衆国優位での分割占領に始まり、前世同様に起こるであろう資本主義と共産主義の対立に合わせ資本主義防衛の同盟者としての地位を確保、経済復興と再軍備を可能とする計画であり、最終的は共産主義の敗北に合わせ連邦側に奪取された部分を回収しライヒの再統一を目標とするものであり、後者はライヒの持つ軍需関連技術とそれにかかわる人材を合衆国へ移転させることで、技術の散逸及びそれらが連邦へ流出することを阻止することを目的とするものある

ターニャが今次大戦で活躍しすぎており単純に逃亡することで安全を確保することは不可能であった。求められるに従い東西南北全ての戦線で暴れまわったターニャは敵そして味方からも『錆銀』『ラインの悪魔』の二つ名恐れられるほどに名を売り過ぎている。いかに肉体が世間一般には保護される対象といえる女性でかつ子供といえどもあまりにも多くの恨みを買い過ぎており勝利者による復讐心が牙をむかないとは限らない。ましてや、連邦などに引き渡された場合はモスコーを襲撃し燃やした張本人である以上、死が福音に思えるほど悲惨な将来が待っていることは火を見るよりも明らかであった。

ターニャは必死の努力により、非公式ながらもライヒと合衆国との協調関係を築き上

げ、自身と大隊からの希望者を演算宝殊関連技術人員として合衆国への移住と庇護の確約を取り付けていた。

順調に進んでいたターニャの帝国脱出計画は、最後の最後で邪魔が入る。それは参謀本部でゼートゥーア大将と最後の打ち合わせを行っていたとき、最悪といえる凶報の形で飛び込んできた

それは東部方面司令部消滅とそれに呼応した連邦軍の東部防衛戦突破の報であった。東部防衛線を帝都の間に障害となるものはただオーヴェル川のみであり、その川とて重砲であれば十分帝都を砲撃可能な距離しか離れていなかった。

合衆国軍を単独で帝都に進駐させ、それに合わせて帝国軍が降伏することにより戦後のライヒに対する連邦の影響を極力排除しようとした計画を危機に陥れたのはあの忌々しい存在Xの手先であるメアリー・スーの暴走である。

魔導師として規格外の強さを持ち帝国とターニャを討ち滅ぼすことが神のご意志であり正義であると固く信じているメアリーは、連邦にとって状況の打破出来る格好の駒であった。そして連邦にとって更に都合のいいことにメアリーは国際協調を演出するための多国籍部隊に所属しており接触も容易であったのである

かくして合衆国と帝国の水面下での動きと隠匿されていた新型兵器の情報を得たメアリーは連邦の期待通りの動きを示したのであった

そして今、ターニャは待ち続けている。
あの日以来、ターニャは鈍い金属光を放つ物体に寄り添い片時も離れることはない。
演算宝珠を握りしめ、短機関銃を手にいずれ訪れる運命を待ち構えている。

第２話：訪問者

「魔導師であれば持ち運び可能な程度にまで小型化されているなど狂気の沙汰ではないか。」

ターニャは目の前の物体を忌々しげに手でたたく。厚みのある金属独特のくぐもった音がする。

鈍い金属光を放つ物体は総重量５００ポンドの合衆国の新型爆弾、東部方面司令部を消滅させたものと同じものである。緊急招集した大隊を率い二発目を投下しようとしていたメアリー・スー率いる合衆国義勇魔導部隊を急襲、奪取したものである。幾度となく首狩り作戦を実行してきたターニャだからこそ辛うじて間に合い阻止し得たのだが、複数の重傷者を出すなど犠牲も少なくはなかった。

そして最大の懸念事項は、メアリーを倒しきれなかったことだ。存在Ｘの加護が与えられたメアリーの防殻はかつてラインの空でネームドの中隊を一撃で全滅させた空間爆撃すら耐えて見せた。自らを囮としている間にヴァイス少佐に率いさせた二個中隊によって組み立てた複合爆裂術式による攻撃は、メアリーの戦闘能力に打撃を与えることに成功したものの、逃亡を許してしまっている。

新型爆弾に寄り添っていたターニャは人の気配を感じる。魔導反応こそないものの、確実に近づいてくるそれにすかさず肩にかけていた短機関銃を向けた。
「なかなか物騒な挨拶だな、まあ、貴官らしいな。元気かねデグレチャフ中佐。」
現れたのはレルゲン准将であった。ターニャは銃口を下に向けると左手で敬礼をする。
「これは失礼いたしました。レルゲン准将閣下」
ターニャはレルゲン准将に目を合わせたまま周囲の気配を探る。一人だけのようだ。
「それが報告を受けた新型爆弾なのか？私にはとても東部方面司令部を一瞬で消滅させられるようなものには見えないのだが。」
レルゲン准将はターニャと背後に横たわる新型爆弾を見ている。
「はい、准将閣下。これこそ帝国が今次大戦に間に合わないと断念し計画を中断したあの原子爆弾、その小型版です。」
ターニャはレルゲン准将に視線を合わせつつ空いている方の手でその新型爆弾を触る。
「技術廠で開発していたものは遥かに大型のものであったはずだが、これが合衆国の技術なのかね。」
「はい、かの大国が潤沢な資金と技術を注ぎ込んで作り上げたものですよ。准将閣下。」

ターニャは会話を続ける。信頼できるはずの人物だからこそ、わずかな違和感を見逃すまいと視線を合わせ続ける。

「では、なぜここには貴官一人しかいないのかね。いかな貴官とて不用心だと思うのだが。」

ターニャは一呼吸置くと、新型爆弾を手で触りながらゆっくりと歩き始める。

「小官は待っているのです。あのメアリーという合衆国義勇軍魔導師が標的とするのは小官、そしてこの新型爆弾です。先日の戦闘で大隊戦力が実質半減した現在、あの化物のような魔導師に対峙するのは小官一人とするほうが合理的な判断といえましょう。」

ターニャはレルゲン准将のほうにゆっくりと振り返る。

険しい顔をし続けていたレルゲン准将はふうっと息を吐くと眼鏡を直し、そしてターニャに告げた。

「貴官は用心深いな。だが、安心したまえデグレチャフ中佐。合衆国義勇魔導士メアリー・スーに対する警戒は不要だ。もう、二度と現れることはない。」